

田中康夫の



「ディスカバー・ジャパン」²⁰

高齢化率とは、65歳以上の老年人口比率を指します。年配者も元気に仕事を続ける日本だけでなく、平均寿命が極めて短い国々を含めた地球規模での設定基準。7%で

された定義です。

日本の高齢化率が7%に達した「高齢化元年」は1970年。昭和45年。「人類の進歩と調和」を掲げ、岡本太郎画伯の「太陽の塔」をテーマ館のシンボルとした、

日本で最初の万国博覧会が大阪の千里丘陵で開催された年でした。

因みに14%を超えたのは1995年。平成7年。而して2013年。平成25年には25%。4人に1人が「高齢者」。8人に1人が「後期高齢者」。今や、人類史上に類を見ない超少子・超高齢社会ニッポンです。

閑話休題。大阪万博閉幕から丁度1カ月後、「鉄道の日」の1970年10月14日、往時の日本国有鉄道は、電通プロデューサー・藤岡和賀夫氏が企画した旅行促進キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」を展開します。

それは、「BEAUTIFUL」と手書きした紙を広げて今は亡き加藤和彦氏が銀座の街を小林亜星氏の音楽をバックに歩く、小林陽太郎氏が率いていた往時の富士ゼロックスが万博期間中に開始した、「モーレッツからビューティフルへ」キャンペーン。更には国鉄「一

高齡化社会。14%を超えるると高齢社会。21%で超高齡社会。奇しくも僕が生まれた昭和31年。1956年、WHO「世界保健機関が国際連合に提出した報告書の中で示

社」提供のTV番組「遠くへ行きたい」とも連動する企画でした。

同年11月号の日本交通公社「時刻表」に掲載された「ディスカバー・ジャパンのお知らせ」冒頭部分を再録しましょう。

「ディスカバー・ジャパン日本を再発見しよう。60年代を馬車馬のようにモーレッツに働いて、国民総生産を自由世界第2位に押しあげた日本、そして私たち日本人。しかしその間に、都会の空はよごれ、田園にまで及ぼうとしているのです。人も、動物も、虫も、魚も、本来のいきいきとした姿を失っています。それでもなお、私たちは成長と繁栄を謳おうとしているのでしょうか。」

本来の成長と繁栄は、人間が人間らしい豊かな環境と、豊かな精神に生活の充足感を持ったときに生まれるのです。

モーレッツからビューティフルへ。私たち日本人はもともと母なる日本を愛そうではありませんか。日本には美しい自然があります。美しい歴史、伝統、人々のふれあいがあります。田舎の土臭い一本の道にも、やさしい一本の木にも、そして一人の老婆にも私た

ちは日本を発見することができま

す。そして日本の再発見は自分自身の再発見でもあるのです。」
東京駅開業100年、東海道新幹線開業50年を迎えた2014年の晩秋、東京駅丸の内駅舎内に位置する東日本旅客鉄道「JR東日本」が運営する東京ステーションギャラリーは「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン『遠く』へ行きたい」展を開催します。

それは、万博開催前年に丸善石油が展開した小川ローザ嬢のTVCM「オー、モーレッツ！」への「オマーージュ」とも評すべき、同じく電通の藤岡氏が担当した「モーレッツからビューティフルへ」のCFや新聞広告も、更には伊丹十三氏をレポーターに起用してテレビマンユニオンの今野勉氏が演出した「遠くへ行きたい」の映像も一堂に会した「同窓会」でした。

日本国有鉄道と電通が、斯くも良い意味でのラディカルな提言を全媒体で展開していた45年前。凡そ弁証法的思考とは対極な、些か空威張りとも思える「日本凄いぞ論」が「横溢」する2015年の年頭に今一度、反芻すべき「矜持と諦観」かも知れません。

★次号(2月号)の発行日は一月30日(第5金曜日)です。